

日本ウィニコット協会 Newsletter

Vol.3 2020

目次

会長挨拶	1
ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」	3
ウィニコット・フォーラム 2020 抄録	6
シンポジウム：遊ぶことと悪ふざけ（石田 拓也）	6
シンポジウム：遊ぶことと言葉のあや～俳句を通して（加茂 聡子）	7
シンポジウム：子どもの言葉にひきつけられることとふりまわされること（渡部 京太）	8
没後 50 周年の会：Winnicott の生涯からみた理論（館 直彦）	9
没後 50 周年の会：移行，中間領域の臨床 1（妙木 浩之）	10
没後 50 周年の会：（川谷 大治）	11
基調講演：言葉の生まれ来るところ（工藤 晋平）	12
協会共催オンライン・シンポジウム実施報告	13
協会からのお知らせ	15
ウィニコット没後 50 周年セミナー	16
編集後記	17

会長挨拶

日本ウイニコット協会 会長 館 直彦

今回の News Letter では、今年度のウイニコット・フォーラムのプログラムとその抄録を紹介することが出来ました。福岡地区のフォーラム担当の先生方には大変お世話になりました。今回は Web を介してということになりますが、皆さんと議論を戦わせることが出来ることを楽しみにしています。抄録を熟読しておきましょう。ところで、このフォーラムでは、シンポジウム、特別講演のほかに、ウイニコット没後 50 周年の memorial meeting を行います。また、それとは別に、来年 2 月 23 日に本協会の主催で、「ウイニコット没後 50 周年に寄せて」という meeting を行うことを予定しています。それ以外にも、2021 年にはいくつかの記念行事を行うことを模索しています。

さて、ウイニコットが亡くなったのは 1971 年 1 月 21 日です。2021 年 1 月 21 日はちょうど没後 50 年ということになります。それに向けて、ロンドンの Winnicott Trust では、Winnicott: A present for the future と題する International Conference が On line で開催されることになっています（これは本来は 2020 年 9 月に開催される予定でしたが、コロナ禍のため、来年の 9 月に順延されました）。日本ウイニコット協会も、同じように、いくつかの記念行事を行うことを考えているのですが、これはただ単にウイニコットを偲ぶということではなく、私たちのウイニコット理解を深めるということでもありますが、会員以外の方々に私たちの存在と活動について知っていただく良い機会ととらえています。

亡くなって 50 年という、一区切りつく、というか、距離を持って考えられる時間が経った、ということが出来るのではないのでしょうか。今日では、生前のウイニコットを実際に知っている人も少なくなっているのではないかと思います。

これまでのウイニコット理解は、「一人の赤ん坊などというものはいない」とか、「すべては遊ぶことの中にある」とかいった言葉などから導き出されてくる明るいイメージ、温かいイメージに満ち溢れているということが出来るのではないのでしょうか。これにはウイニコット自身が本当に遊ぶことが好きだった、ということが反映しているのだと思います。また、彼が生き生きとすること aliveness を治療目標としていたこともそういうイメージに貢献していると言えるでしょう。そういうことがウイニコットの魅力の一部分を構成している、と言っても間違いではないでしょう。しかし、それらはやや理想化されたイメージかもしれません。この没後 50 年という機会をとらえて、もう一度ウイニコットの人物像と理論について検討してみるのも良いのではないかと思います。そういう側面からウイニコットを論じた研究書も、最近、次々と刊行されています。

ウイニコットはどのような人だったのでしょうか。彼は、結構傷つきやすい人だったようですし、落ち着きのないというか、常に仕事をしていないと駄目な人のようです。彼はナルシシスティックな人だったと言われることがありますが、彼のナルシシズムはそれな

りに満たされていたようですが、順風満帆な人生を送った訳ではないようです。そういう彼の生き方が、どのように理論に反映していたのかを検討することは重要ですし、そこから見えてくる彼の理論の限界と、そこから生まれてくる更なる発展を考えていくことも重要だと思います。私たちが、トータルにウニコットについて考える地点に漸く辿り着いた、と感じているのは私だけでしょうか。

ウニコット・フォーラム 2020

「遊ぶことと言葉のあや」

今年度のウニコット・フォーラム福岡は、「遊ぶことと言葉のあや」をテーマにして開催することとなりました。

日本ウニコット協会が設立された昨年のウニコット・フォーラム大阪では、ウニコットの臨床的知見をひろくとらえなおす会でもありました。そこで、今回は「遊ぶこと」に焦点をあて、さらに、日本語のもつあいまいさ、ふくみ、うらはらさ、などから生まれる言葉遊びや言葉として表現されたところ（文脈）と意図との間で生じるすれ違いや誤解などもふくめた「言葉のあや」とをシンポジウムのテーマにしました。「あや（綾）」には、ものの表面にあらわれた様々な形や模様・入り組んだ仕組み、たて糸によこ糸を斜めにかけて模様を織り出した絹という意味もあり、複雑なかたちで表現されていることの背景も踏まえて、こころの中のからまりを解きほぐすのが臨床実践といえるかもしれません。面接者とクライアントの間に行き交うさまざまな思いや考えの中で織りなされて表現される言葉や遊び、およびその臨床的な意義などについて考える会になればと考えております。さらに、本年はウニコット没後50年の節目でもあり記念の企画も行うことにいたしました。

新型コロナウイルスの感染状況も踏まえてオンラインでの開催といたしました。ご参加をお待ちしております。

記

日時：2020年11月29日（日）10:00～16:10

会場：オンライン(事前予約制)

定員：150名(先着順)

参加資格：守秘義務のある専門家

参加費：会員 ¥3,000 / 非会員 ¥3,500

大学院生（臨床関係の大学院在籍者）¥2,500

申込方法：URL(<https://form.os7.biz/f/3cd26439/>)または、QRコードから

申込みフォームを開いて必要事項を記載し、お申込みください。



※申込内容を確認後、事務局より参加承認（振込等の情報）のメールを送信いたします。

【参加にさいする留意点および遵守事項：必ずお読みください】

今年のウイニコット・フォーラム福岡 2020 ではオンライン実施に伴い、事例検討は実施しないことにいたしました。加えまして、参加者の皆様には、参加に際して得られた情報の取り扱いにつきましては、特に SNS 等のオンラインへの投稿をしないことなどは当然のこととして、最大限の配慮および管理をお願いいたします。

参加申込の際には、以下の条件を確認のうえお申込みください。申込フォーム内に同意の有無を確認する事項がございます。同意いただけない場合には、参加を承認することができません。ご了承ください。

- 参加資格は守秘義務のある専門家に限定いたします。
- 参加に際して得られた情報は、SNS 等をはじめとするオンラインへの掲載および投稿は厳禁と致します。
- 参加者には配信を行う URL をメールで開催 10 日ほど前に送信致します。このメールを他者に転送することは厳禁と致します。
- 個人での録画や録音、スクリーンショットも含め厳禁と致します。
- 参加する場合、個室での参加をお願いいたします。参加者以外の方が画面を見たり、音声を聞いたりすることができない環境でご参加ください（カフェや図書館など他の人が偶然にでも画面を見たり、音声を聞いたりすることができる環境での参加は不可と致します）。
- 個人 ID 等でのログイン設定のない無料Wi-Fi など、通信を傍受できる可能性のあるネットワークからは参加しないでください。
- オンライン実施のため、電波状況によっては中断などが生じる可能性があることをご了承ください。
- 個人の受信環境により、当日参加できなかった場合、返金は致しかねます。ご了承ください。
- 時間数の条件に満たないため、今回は臨床心理士の資格更新の研修ポイントにはなりません。

プログラム

10:00～10:05 大会長挨拶

川谷 大治（川谷医院）

10:05～12:25 シンポジウム「遊ぶことと言葉のあや」

「遊ぶことと悪ふざけ」 石田 拓也（たちメンタルクリニック）

「遊ぶことと言葉のあや～俳句を通して」 加茂 聡子（四谷こころのクリニック）

「子どもの言葉にひきつけられることとふりまわされること」

渡部 京太（広島市こども療育センター）

指定討論：鈴木 智美（精神分析キャビネ）

司会：山崎 篤（中村学園大学短期大学部）

増尾 徳行（ひょうごこころの医療センター）

12:30～12:45 総会

12:45～13:45 休憩

13:45～14:45 「ウイニコット没後 50 年の会」

「Winnicott の生涯からみた理論」 館 直彦（たちメンタルクリニック）

「移行、中間領域の臨床 1」 妙木 浩之（東京国際大学）

川谷 大治

司会：川谷 大治

15:00～16:10 基調講演 「言葉の生まれ来るところ」 工藤晋平（名古屋大学）

司会：恒吉 徹三（山口大学教育学部）

お問い合わせ：

川谷医院内 ウイニコット・フォーラム福岡 2020 事務局

（担当：恒吉徹三、稲員修平）

〒810-0012 福岡市中央区白金 1-12-2

mail： 2017winnicott@gmail.com

ウイニコット・フォーラム 2020 抄録

シンポジウム

遊ぶことと悪ふざけ

たちメンタルクリニック 石田 拓也

Winnicott は、精神分析は「遊ぶことを高度に特殊化した形態」と述べている。精神分析の中に遊ぶことがあるのではなく、遊ぶことの一つの在り方として精神分析が存在する。つまり Winnicott にとって、遊ぶこと、リアルであることが第一であり、精神分析はそれを実現させるための実践手法の一つであったということだろう。確かに精神分析的な設定における実践において、時に私たちはそのような経験をすることがある。一方で、館 (2012) が指摘するように、精神分析における患者と治療者の二人のやりとりは外から見れば滑稽なものにもなり得る。心理療法は、本人達にとっては大真面目なことであっても視点を変えればナンセンスで喜劇的でもあるのだが、それは赤ん坊とそれをあやす母親や、さらに遊ぶことにおいても同様である。何より、母親があまりに四角四面に赤ん坊の相手をしてしまうと、お互いに息が詰まるだろう。ただ、私たちの日常にありふれたお笑いを取ってみると、芸人が空気を読めなかったりボケやツッコミのやり方を間違えたりするとスベることになり、悲惨な結末が待っているということもある。

しかし、そもそもスベるためには、あるいは言葉を綾なすためにも、そのためには相手が必要だ、とも言える。たとえスベったとしても、それがナンセンスな滑り芸として遊ぶことに繋がることもあるのである。子どもが一人で遊んでいても、それを笑いに変えたり滑ったりさせて、あやしてくれる対象なしには、それはただの悪ふざけになってしまう。そのようにして、子どもの表現が遊ぶことになっていないという例は多いように思う。Winnicott は精神療法における治療者の仕事として、「患者を遊ぶことができない状態から遊ぶことができる状態へと導くこと」を挙げている。今回の発表では、この Winnicott の箴言とともに、遊ぶための環境を提供することによって、悪ふざけが遊ぶことへと変わるその時様について、ある臨床例を通して考えたい。

ウニコット・フォーラム 2020 抄録

シンポジウム

遊ぶことと言葉のあや～俳句を通して

四谷こころのクリニック 加茂 聡子

木がらしや目刺にのこる海のいろ 芥川龍之介

俳句とは、五七五の十七音からなり、季節に結びつく言葉である季語を含む定型詩である。「俳」という漢字は、二人の人が戯れる様の象形が由来とされる。俳句の始まりは、江戸時代の連句での、発句を独立させたところにあるが、連句がグループの遊びであったのと同様、現在も、俳句は「句会」というグループ活動で楽しまれることが多い。十七音という短さ故に、恐らく他の文芸以上に、俳句はその鑑賞を読み手に委ねる割合が大きい。句会は発表の場だけではなく、その場での他者からの鑑賞や批評によって、作者が新たに着想を得たり、推敲することも稀ではない。俳という文字の由来がそうであるように、俳句という文芸はその創作の過程から句座の仲間や師という他者を必要とする。

一方、技法の一つとして、句の中に「切れ」を入れることが挙げられる。冒頭の芥川の句に戻れば「木枯らしや」で句は切れている。木枯らしや雪といった季語は、わたしたちに多くの感覚や情緒を想起させる機能をもつ。頬を切る冷たさや、冬の初めの匂い、風の音、そして木枯が吹いていたときの読者の特定の記憶が想起される場合もあるだろう。目刺しにのこる海のいろ、は作者の個人的な把握だが、あの胴体の青みある艶に彼は海のいろを見たのだろう。その、これは海の色が残っているんだ、という軽い驚きと、季語木枯らしにまつわる感覚的な記憶とのあわいに詩は生まれる。

ウニコットは心理療法を患者と治療者それぞれの遊ぶことの領域の体験の重なり合いの中で起こる、と述べた。そして、遊びは個人と環境（対象）の間の可能性空間に生まれると彼は考えていた。この可能性空間とは、主観的な対象と客観的に知覚される対象とのあいだとして示されている。

今回、わたしは俳句という文芸に含まれる「季語」が作者、読者にとっての共有された現実であるという前提に立ち、句会という場や詩形そのもののもつ特徴がどのように言葉を綾なすこと、遊びに寄与するかということについて論じる。

ウイニコット・フォーラム 2020 抄録

シンポジウム

子どもの言葉にひきつけられることとふりまわされること

広島市こども療育センター 渡部 京太

私が、その少年 Z に出会ったのは相談機関だった。Z はきょうだいへの暴力行為のために保護を受けていた。Z は相談機関に新しい入所者が来ると激しく怒り出すためにコンサルテーションを求められたのだった。私が Z と初めて面接した時に感じたことは、以前治療に関わったことがあり現在も犯罪行為を繰り返している男性と生き写しだったのである。私は臍をかみ、今度こそはなんとかしなくてはいけないという思いにかられたのだった。Z は私との初めての面接の中で、夢を語りだした。Z が語った夢は、Z の置かれている状況をはっきりと示していた。Z は夢を語った後に、「身体が痛い」と話した。私は、Z が心の痛みを心の痛みとして感じられずに、身体への痛みとして感じていると感じた。私は Z にそのことを伝え、私は Z との今後の治療は難航することを予測した。その後、私は児童相談所の嘱託医として、Z の両親や Z との面接を行った。私は、Z が矯正施設に入所することになると思っていたが、Z は家庭に戻るようになった。Z の実父は衝動的な人で、母親と駆け落ちして、Z の妊娠がわかるとすぐに別れた。Z の母親は家族のなかでは認めてもらえずいつも虐げられていた。このため Z を連れて実家に戻った母親は、家族から非難された。その後母親は結婚し新たな家族を築いたが、Z は家族が崩壊をきたすことにつながることを周囲に吹聴し、家族は崩壊にさらされ、Z との治療的な関りは無力化された。Z の治療は Z の言葉のあやにふりまわされ、私はその対処に追われ、さまざまな治療的な介入を計画したが、まったくあそびがないのっぴきならない混乱状況に追いこまれた。Z は矯正施設に移り、徐々に立ち直りつつあるが、Z の治療経過、そして Z の家族が立ち直っていく経過を振り返りたいと思う。

ウイニコット・フォーラム 2020 抄録

ウイニコット没後 50 年の会

Winnicott の生涯からみた理論

たちメンタルクリニック 館 直彦

Winnicott は 1896 年に生まれ、1971 年に亡くなっている。それ故、2021 年は彼の生誕 125 周年であり、没後 50 周年という memorial year ということになる。それにちなんで、私は、彼の生涯からどのように理論が展開していったのか、という視点からアプローチを試みたい。

彼の人生は順風満帆だったとは言い難い。経済的に恵まれていたとはいえ、子ども時代の彼の家庭では、父親は心理的に不在であり、母親はうつ病であった（Green の言葉を用いるなら「死んだ母親」だった）。彼は女性に囲まれて育ったが、乱暴な彼は、早々にパブリックスクールに放逐された。第一次世界大戦が始まり、医学生だった彼は駆逐艦に乗ったが、この大戦で多くの級友を失っている。そんなトラウマも抱えて心氣的・心身症的になった彼は分析を求めて Jones のところに相談に行き、James Strachey から分析を受けることになったが、この分析は難航を極めた。彼は分析が始まる頃に結婚したが、最初の妻は精神的不調をきたした。しかも、彼は Jones などから治療困難な患者たちを押し付けられ、患者の中には彼の家を水浸しにする者もいたし、何人かの患者は自殺し、それにショックを受けた Winnicott は心臓発作を起こした。最初の分析に不満だった Winnicott は、Riviere 夫人から二度目の分析を受けることになるが、この分析は料金の設定からしてやり合うような波乱を含んだものだった。そのうちに第二次世界大戦が始まり、ウィーンから Freud たちが移住し、英国精神分析協会では熾烈な党派的な対立が起こった。Winnicott は、Klein と Anna Freud からは気に入られていたが、両者を取り持つことには失敗し、彼自身孤立を深めていった。その間に、彼は Clare Britton と不倫を始めたが、正式に離婚して再婚するのは、父親が亡くなってからだった。60 年代には彼は半ば引退し、論文の執筆と講演活動に軸足を置くようになるが、常に健康問題に爆弾を抱えていた。だから、彼が Gabrielle と自分が死ぬゲームを繰り返したことは首肯出来るものであるし、May I be alive when I die. と祈ったのは本気だったのだろうと思う。1968 年に NY で肺炎になってからは、自分の死期を意識した彼は、大急ぎで仕事をまとめていく。

今回、私は、こうやって簡単にまとめただけでも波乱に富んだ彼の人生が、彼の理論にどのように結びついているかを、いくつかのポイントに絞って概観したい。

ウイニコット・フォーラム 2020 抄録

ウイニコット没後 50 年の会

移行, 中間領域の臨床 1

東京国際大学 妙木 浩之

これまでにウイニコット・フォーラムで語られたことは、精神分析に対して、彼が与えてきた影響の大きさであり、彼の臨床理論を通して実践を理解する人と、従来の精神分析理論を訓練を受けてきた人との、臨床的な在り方の違いだった。それはとにかく、間にとどまる、あるいは中間にとどまり続けるということだったのだろう。現代の精神分析は、そこからはじまるきわめて豊かな空間を共有する方向に帆を進めようとしているように見える（例えば Perelberg など）。だからこの研究会の方向は、現代の精神分析がウイニコットの消化したうえで、新しい臨床理論の可能性を模索する方向に進んでもらいたいと思っている。いくつかの方向があるが、どれもウイニコットの論考を吟味した後にしか出てこない論点だと思う。いかに列挙しよう。

1. 遊びとしての間の空間
2. 移行対象の登場と子供の認識に錯覚が生じること
3. 夢の内容ではなく、夢の語りと聞き手とが存在していることのほうが大きいという語用論的な夢理論
4. 解釈に関して理解の限界を示すために言葉を使うこと
5. 一致（錯覚）とともに、不一致やずれ（脱錯覚）が重要だというコミュニケーション理論
6. 本当の自己と偽りの自己を共に認めると、一人でいること、ひきこもりや自閉の重要性とその臨床

こうした論点のうち、今回は3から5についてお話しておきたい、つまり私とあなたとの間には美しい誤解があったとしても、それは転移であり、重要なのは、私が言うことが違う、あるいは間違っているという感覚のほうであり、そのずれを共に胎児にしていくことが臨床家としてもっとも重要だということである。だからこの議論も含めて、私の言葉を理解して納得していることよりも、それは違うのではないかと思う、その思いのほうが必要なのではないだろうか。ウイニコットの臨床を思うときに、そしてそれを私が語るときに、つねに本当の私のなかで反芻している言葉であり、控えめで、前に出ないことのほうを選択し続ける理由でもある。

ウニコット・フォーラム 2020 抄録

ウニコット没後 50 年の会

川谷医院 川谷 大治

私はこの数年ウニコットの書かれたものを読み直している。『逆転移における憎しみ』(1949),『精神分析的設定内での退行がもつメタサイコロジカルで臨床的な側面』(1954),『破綻恐怖』(1963)などである。国際精神分析研究雑誌ではオグデンの「ウニコットを読む」がシリーズ化されていたので、その焼き直しみたいな感じで読み直している。最近、ウニコットの遊び論に「真剣と本気」の違いも心に引っかかっている。ある患者を[あえて](#)本気(?)で怒って失敗したからである。後に真剣(?)にやればよかったと反省した。

私が小学 5 年生の頃、遠足が終わり、いつもより早く下校したのを知った近所のシュンちゃんが遊びにやってきた。NHKの子供番組を一緒に見ているうちに、私がライオン役を振り当てられて人間の子とライオンの戦いが始まった。彼は遊びに夢中になり、私をやっつけに来ては追いかけられる遊びを繰り返した。その遊びは延々と繰り返された。私も、真剣にやると彼が喜ぶのでしばらく相手になった。そのうち私は遊び心から本気になって咆哮し彼を威嚇した。彼は泣き出して遊びは終わった。

今思えば私はライオンごっこに飽きたのかもしれない。しかしこのエピソードは精神科医になって精神分析を習い始めた研修医の頃のボーダーライン治療に役に立った。プレイルームで描画に飽きた女子大生の患者は私の持つパンチングマシーン人形にケリやパンチを入れだした。やられ役の私は彼女の攻撃を受け止めた。これは真剣に受け止めなければならない。本気(報復)でやってはならないのである。

ウニコットは第二次世界大戦中に剥奪された子どもたちの世話をした経験から「保護者に客観的に憎む能力があるかどうかについての証拠を探し始める」、「彼は、憎まれていることに到達したあとで、初めて愛されていることを信じられる」と書き、「母親はまず最初に赤ん坊を憎む」と説いた。セラピーでは真剣に分析作業は続けねばならないが本気で怒ってしまつては元も子もないのである。

本日は、今年の 2 月から夢中になっているスピノザを絡めてウニコット論を思いつくままに話せたらと思う。

ウニコット・フォーラム 2020 抄録

記念講演

言葉の生まれ来るところ

名古屋大学 工藤 晋平

ウニコットは言語の獲得について、あるいは言語能力の発達について、ほとんど何も述べていない。象徴化については移行現象との関連で書いている。理論的に考えれば、言語の獲得は象徴化と並行する。それにも関わらずウニコットはこれに触れることなく済ませている。外国語を話す子どもと交流できた彼にとって、言葉はそれほど重要なものではなかったのかもしれない。むしろ彼にとって重要であったのは、言葉がどのように使われているか、であったように思える（たとえば、ピグルにおける「恥ずかしい」）。

ここには2つの水準が存在していると仮定することが出来る。1つは、言葉がその人によってどのように使われているのか、という「使用」の問題であり、もう1つは、その人が言葉を使えるようになってきているのか、という「発達段階」の問題である。言葉が「使用される」ためには、言葉と「関係する」ことが先行している必要がある。ウニコットの発達論に従えば、私たちはそう主張することになる。そして、関係することは「無定形」の状態から、すなわち言葉が言葉として機能しない状態において始まるのだ、ということになる。もしもそこに遊ぶことが成立しなければ、無定形から生まれいずる言葉は、身体に住まうことがない。

『由熙』という在日韓国人作家の手による小説がある。父親を、そして彼の祖国韓国を好きになれない由熙は、毎朝アーっと言って目を覚ました。その音は「あ」なのか「ア」なのか、言葉の杖をつかもうとして、掴めないままに、彼女は母国を失った。

言葉話すことと、話された言葉が使われることは、位相の異なる事象である。私たちは自由連想において、言葉を聴いているのではない。そうではなくて、言葉の生まれ来るところを、連想を語るまさにその人を聞いているのだと、そのように言うことができるかもしれない。

協会共催オンライン・シンポジウム実施報告

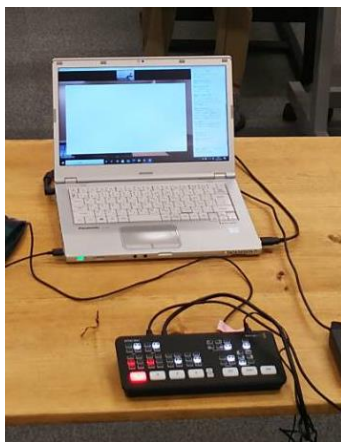
実施報告：オンライン・シンポジウムを設えること

和こころのクリニック王寺 奥田久紗子

先日、大阪対象関係論研究会では、日本ウニコット協会のご協力を得て、オンライン・シンポジウム「精神病の対象関係論」を開催し、無事に終了いたしました。13名の会員の先生方にご参加いただきました。まずはこの場を借りてお礼申し上げます。

オンライン・シンポジウムがどのようなものであったかを、企画者の一人として、私の体験を書くことで報告に代えさせていただこうと思います。シンポジウムは、作山先生に Freud の精神病理理解について概観していただくことから始まり、Winnicott が精神病をどのように理解していたのかについて、石田先生の考えを発表していただきました。次に、館先生には Rosenfeld が精神病をどのようにとらえ、患者とどのように会っていたのかについてお話しいただき、増尾先生に Bollas が精神分析を精神病的破綻を支える方法、あるいは場として位置づけているということを解説していただきました。最後に、川崎先生から各先生方に質問を投げかけ、それをもとにディスカッションを行いました。

文字で読む限りでは、フロアを交えたディスカッションの際に、オンラインでご参加の先生方の声や顔が機械越しであったり、司会者の代読する声が変わっていることくらいのように思えるでしょう。あるいは、zoom のあの、画面上に小さな窓がいくつか並び、話している人の窓の枠に色がつく絵を想像されるかもしれません。こういった、ともしれば単調で一方向的なものになりがちなオンラインでの発信を、少しでも生き生きとしたものにしたい、というのが演者と私の考えでした。まず考えたのは、対面という設定でシンポジウムに参加する時に、私は何をどのように見ているだろうということでした。普段意識し



手前の黒い機材がスイッチャー

ない自分の視線の動きを考えてみて、(私の場合は)発表スライドと演者、手元の資料やノート、そして時々視線を外し、会場の様子をぼんやり眺めていると気づきました。この動きを完全に再現することはできないまでも、なんとなくそういった雰囲気をつくりだせないだろうかと思い、スイッチャーという画面を合成する機材(左図)を導入することになりました。私は機械に強いというわけではありませんが、この頃には、企画者から機材担当へと役割が変わっていました。買い与えられた新しい機材を前に、電源の入れ方さえわからず、説明書、ネットのまとめ記事、Youtube などを見ていると、この機材

で多くのことができるらしいことがわかりました。私に使いこなせるだろうか、紹介されている“すごい”使い方がシンポジウムにフィットするものなのだろうか、そんなことを考えていました。駆け出しの心理士でもある私は、正直、機材に明るくなるよりは、臨床に役立つ何かしらを読んだり見たり、聞いたりしたいと思ったりもしました。とはいえ、やるからには、と思い、考える→実験→考える→修正→実験→考える…というプロセスを、他の人を巻き込みながら繰り返していきました。どのようにすればスムーズに進行できるだろうか、対面だったらどういうことが起こっているだろうか、どのようにすれば画面が単調にならないだろうか、どのタイミングで、どこに、どのくらいの大きさをスライドを出せばいいだろうか、どのようにすればオンラインでご参加の先生方と双方向のやりとりができるだろうか。オンラインで見た時に、この画面はどのように見えるだろうか。ここに挙げたのはほんの一部ですが、たくさん“？”を扱っていたように思います。わかってくると楽しくもなりました。

画面を半分に分割してみたり、ワイプのように資料をメインにして演者は小さな窓に映してみたり、色々実験して、最終的に落ち着いたのが、この形でした（左下図）。案外シンプルな絵です。今回のオンライン・シンポジウムのやり方や、この画面の絵の形が、ご参加の先生方にとって良いものだったのか、正直それはわかりません。賛否両論あるかと



Zoom 上での表示のされ方

1~5：演者の先生方とその発表スライドが画面上に同時に表示されている

6：質疑応答時の会場の様子。中央の黒い機械は、演者の先生方が Zoom 上でどのように表示されているかを確認するための PC

思います。まだまだ改善の余地もあるかと思えます。それはそれとして。私がやってしたのは、慣れない機材を使って、シンポジウムという場を設えることでした。しかし、このようにして報告という名目で自分の体験を書き起こしていくと、セラピーでクライアントに向かう時と同じ気持ちだな、と思えてきました。つまり、はっきりとはわからないけれど、その時点で自分にわかっていることはこうである、ということをはっきりと形にしていくというプロセスが似ているように思います。

協会からのお知らせ

研修会・協会共催事業のご案内について

日本ウィニコット協会では、ウィニコットおよび独立学派に関する研修会や、協会共催事業を会員の皆さま宛てにご案内させていただいています。

つきましては、会員の先生方が主催されている研修会などで、会員の皆さまにご案内したい内容がございましたら、協会事務局宛てにメール【jwasecretariat@gmail.com】にてご連絡ください。理事会にて審議の上、承認された場合、協会ホームページの「研修会情報」への掲載と、メーリングリストでの配信をさせていただきます。

なお、メールの件名を「研修会（協会共催事業）掲載希望」とし、本文に研修会の詳細をご記入ください。フライヤーの画像データやPDFなどがあれば、そちらも添付していただければ掲載いたします。

協会からのお知らせ

ウニコット没後 50 周年セミナー

2021 年はウニコットの没後 50 周年であるとともに、生誕 125 周年でもあります。日本ウニコット協会では、来年 2 月 23 日にウニコット没後 50 周年を記念したセミナーを行うことを予定しています。

詳細が決まり次第、当協会 HP および会員メーリングリストでお知らせします。

編集後記

ニューズレターの体裁をテンプレートにしているのですが、そのテンプレートにあわせて先生方からの原稿の体裁をそろえながら、抄録に目を通していたら、この編集作業はさながら、織物をしているようだなという空想が湧いてきました。このテンプレートが機織り機で、先生方の原稿（ご発表）が糸といったところでしょうか。綾織は糸を斜めにかけている分、柔軟性があるらしく、今回のオンライン開催というセッティングの柔軟性に似ていると思ったことがこの空想の素材のようでした。綾織は複雑な模様をつくりだしますが、この模様という言葉も、柄やパターンという意味だけではなく、「様子」を示す言葉でもあると思うと、今回のウイニコット・フォーラムが、どのような模様を織りだすのだろうと楽しみになりました。抄録を読みなおして参加したいと思います。Vol.3の発行するにあたり、ご協力いただいた全ての先生方に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。次号の発行は、1月下旬～2月上旬を予定しています。

コロナの猛威は相変わらずですし、寒くなってくるとインフルエンザなども流行ってくるので、どうぞご自愛ください。

(奥田久紗子)

2020年11月16日発行

日本ウイニコット協会 Newsletter vol.3

編集：石田 拓也

奥田 久紗子

発行：日本ウイニコット協会

日本ウイニコット協会事務局

e-mail：jwasecretariat@gmail.com

HP：https://winnicottforum.com

〒543-0001

大阪府大阪市天王寺区上本町6丁目6-26 上六光陽ビル601

たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内
